ARCHITECT

Japan Institute of Architects

1988 11—NOV

CONTENTS

●建築家への期待　須田　寛氏に聞く
●いまだ現役のバリバリ　佐久間達二先生訪問
●唐草文様からアーバンデザインへ　林　英光
●建築家の出現と役割の分化　瀬口　哲夫
●5階建集合住宅にエレベーターは必要か　野口　浩

No. 2
ARCHITECT
88 — 11 NOVEMBER

CONTENTS
目次

会員ずいひつ——2
社会の優れたCoordinator　豊島　祐昌
レトロスペクティブの正体　丹羽　勝美
サグラダ・ファミリアに想う　中島　一
デザインと環境　谷村　茂
「なじむ」　平岩　保
建築家への期待——5
須田　寛氏（東海旅客鉄道㈱取締役社長）に聞く
唐草文様からアーバンデザインへ②——8
林　英光
“未開と文明　沖縄と本土”——9
都市に明日はあるか　広瀬　一良
職業としての建築　②——10
建築家の出現と役割の分化　瀬口　哲夫
佐久間達二先生訪問
いまだ現役のバリバリ——12
自然からの恩恵と発想——14
柳沢佐和子
5階建集合住宅にエレベーターは必要か——15
野口　浩
関西国際空港設計競技について——16
ふれよう！　いきずく足助ウオッチング——18
塗る時代から貼る時代へ！——関西ペイント㈱——18

建　築　歳　時　記

1940年（昭15）11　住宅対策要綱
1945年（昭20）11.21　住宅緊急措置例
1946年（昭21）11. 3　日本国憲法
1946年（昭21）11.11　住宅よこせ大会
1952年（昭27）11　建築事務所懇談会結成
1953年（昭28）11　建築界で伝統論議始まる
新建築11号「住宅計画における民族的伝統と国民的課題」西山夘三
1956年（昭31）11　日本建築家協会発足
1956年（昭31）11　首都圏整備法による住宅建築10ケ年計画
1964年（昭39）11. 1　第一回日本建築祭開催
1964年（昭39）11.20　日本建築センター発足
1966年（昭41）11. 3　古都保存法公布
1971年（昭46）11. 8　住宅建設促進協議会結成
1975年（昭50）11.18　日本建築設計監理協会連合会発足

会員ずいひつ
デザインエイジによせて

社会の優れたCoordinator

豊島祐昌

フォスターのハイテック・香港上海もいい。丹下の新都庁舎も優れたものになるだろう。ポストモダンが建築デザインの主流（デザインの世界における“主流”という用語の用い方には抵抗があるが）であるか否かの議論は別として、現代建築の流れの中での“必然”であることには間違いない。

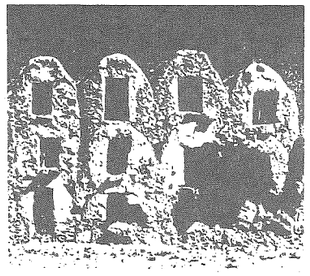
一方で、槙文彦のSPIRALのごとき街並に見る建物はもちろん、いささか古いが毛綱の釧路湿原の場合にしろ、建築それ自身が単独で存在することはあり得ない。建築の特にその外観は、周辺環境・背景を含んだ景観の中に置かれた「モノ」としてそのあり様を評価される。建築はその巨大なフォルムを露呈した瞬間から創作意欲に燃えた作家やclientの手を離れて、公共のあるいは自然の景観の一部となる。dynamicな都市景観の変化をよりいっそう加速させる結果になろうとも、山並や森が相手のstaticな自然に同化するものであろうとも、建築デザインは景観形成の主要なelementとして位置づけられることに違いはない。

古来道具の類は、その個体美が評価されるだけでなく、同時に床であれ竈であれ置くべき“所”が選ばれた。結果として居すわったものもあるにしろ、「モノ」としての道具の美しさと空間のあり様とが一体となった時に、確実にデザインされた建築空間が形成され、デザイン行為は完了する。竣工後の建築物に対して作家の意志が反映されにくい社会的土壌があるにしろ、造り放しの建築物がまだまだ多いのも事実であろう。

日本産業振興会が行っているグッドデザイン商品（いわゆる“Gマーク”制度）選定に際しての評価項目は、外観・機能・品質・安全性さらに商品としての価格の適正さなどにあるとのこと。各項目には詳しい評価基準があるようだが、消費者大衆を意識せざるを得ない商品としてのデザイン評価にはどのような基準があるのだろうか。デザイン評価に対する主観性を考えた時に興味深い。良いデザインの“選定”に際して「機能」以下の技術的で比較的客観性の強い項目も含まれているのは当然のことながら、面白いと感じたのは、アフターサービスの必要な商品については、サービス体制という極めてソフト的要素も評価対象となっているとのことで（佐藤典司著「デザインに向かって時代は流れる」）、何やら身につまされる感じである。

都市レベルから、家具、日用品といったヒューマンスケールの小物にいたるまでデザインの分野は広い。建築自体が「モノ」であり、それぞれにデザインされた、しかし全体としてはかなり雑多な「モノ」のいれものでもある。建築家はその意味でも社会の優れたCoordinatorとしての役割を負わされている。

（㈱日建設計名古屋事務所）



レトロスペクティブの正体

丹羽勝美

＜レトロする＞

80年代――車がまるくなってきている。

なつかしい曲線なのか、来るべき時代の曲線なのか。

＜なつかしさ＞

60年代――すべてが一致していた。

強さと美しさは同じもので、しかも正しさでもあった。写真は真実を語り、明るさは表通りに、暗さは物影にあった。小さい頃の記憶と結びついたいろいろな形は、母が世界で一番優しくて、父が世界で一番強かった時代を思い起こさせる。古き良き時代への入り口。

＜あこがれ＞

50年代――青春が青春だった時代。美しい女性はあくまでも美しく、哀しい話はどこまでも哀しかった。そしてワルモンは徹底的に悪かった。何もかもが、完全にそのものらしくて……私たちはすべてを忘れてあこがれることができる。

父や母が今の自分と同じくらいの年で、きっと今の自分と同じように夢中になったに違いない。共鳴と理解。

＜誤解＞

30年代、40年代――どこかで見たような気がする。知っているような気がする。でも、どこかで見たのか、思い出せない。本当に見たのかどうかも、わからない。たとえ見たとしても、すでにリバイバルされたものだったのかもしれない。

それでも、それが古いというだけで感じるなつかしさ。父や母、祖父や祖母なら、きっと確かに感じているであろうなつかしさを自分も感じているように思っている誤解。

＜願望＞

20年代――華やかな時代。美術と風俗の境がなくなって、あらゆるものが街にあふれる。表面を覆う美しい化粧。ファッション。ダンスと宴。お祭り。その下に隠された地下的なもの。頽廃的なもののもつマイナスの魅力。

知っているはずのない時代。にもかかわらず、その頃の形にあこがれとなつかしさを感じる。これは、過去は自分たちの後ろにあるという思い込みと、誰かが感じる古き良き時代を、自分も感じていたい、という隠れた願望のもたらすものではないだろうか。

（レトロは決して過去をなつかしむことではなくて、全く今の自分が、今の世界を感じることだ。

そういう意味で過去は必ずしも私たちの後ろにではなく、前にあるのかもしれない。）

（㈱丹羽勝美建築設計事務所主宰）

サグラダ・ファミリアに想う

中島　一

ヨーロッパを旅して、何より圧倒されるのは、れんがや石で積み築き上げられた建物の重量感、それが幾世紀もの長い歴史を生き抜いてきた風情に私どもは心打たれるのである。

幾世紀とまでとはいわないが、ここ約100年、今日なお建設中のサグラダ・ファミリア――未完成どころか、正面の四本の尖塔、背面の同じく四本の尖塔、それにほんのわずかの壁体が建ち上がったところ。このぶんでいくといつ完成するか見当もつかないガウディの最高傑作の前に立つと、その息の長さ、スケールの大きさにまず圧倒され、この教会堂の持つ芸術性に魅せられる前に、この建物を通して、人生の無常感を思い知らされるのである。

ご承知のとおり、これはヴィラールによる当初の計画を、ガウディが全面的に改変した大聖堂である。

ルネサンス以降の建築を堕落とみなす彼は、支柱を傾斜させてフライング・バットしてを不要とすることでゴシックを再創造しようとしたものである。

ところで、いま、外国の建築家で最もよく知られているのは、このアントニオ・ガウディじゃないかナーと思う。それがここ数年衰えそうにない。

どうやらこの発端は、1984年の夏ころ、サントリーのＴＶコマーシャルにこの教会堂が登場し、これを追っかけるかのように、勅使原宏氏の映画「アントニオ・ガウディ」が上映され、地方都市を巡回して、行く先々で熱狂的に迎えられたのである。

しかし、これより5年前、私どもは、名古屋市博物館でガウディにお目にかかっている。もう少し正確に話そう。1979年6月19日（火）～6月24日（日）の6日間ガウディ名古屋展実行委員会主催で行っている。ところが入場者は予想を相当下回った残念なことを覚えている。

さて、私はこの大聖堂の前にたたずむこと、すでに5回目になる。ヨーロッパのそれぞれの都市に建つ中世の大伽藍が、何世紀にもわたる工期を費して竣工したものが多いということを私どもはよく知っている。しかし、このサグラダ・ファミリアの竣工まで私は生き延びられないことは事実である。この工事現場に立ち入って部材が組み立てられていくプロセスを喰い入るように眺めているのは私一人ではない。私を含め意外に多い見学者のほとんどが中世のその時期に工事現場を見た人たちと、似たような感慨を味わっていることだろう。

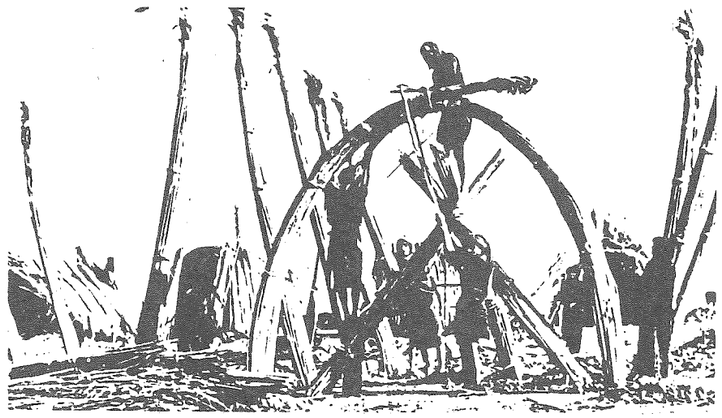
（愛知工業大学教授）

デザインと環境

谷村　茂

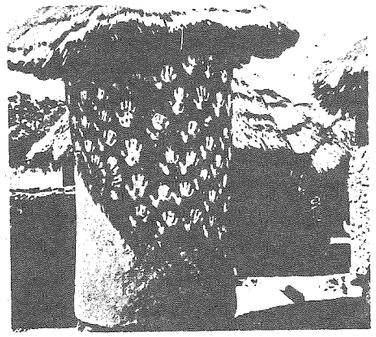
デザインというものは周囲の環境に影響を与えるし影響を受けます。すなわち環境は人間の行動を左右する大きな要因と言えるでしょう。傑出した天才はともかく、普通の人たちにとって環境は心的にも物的にも大変大事なものです。能力的に普通のレベルの人なら周囲の状況によってそのレベルにいつのまにか近づいていくのではないでしょうか。有名建築家や設計事務所の作品に、それぞれ固有のデザインがでてくるのも、人的資質より以上に環境が強い要因になっていると思います。

私がアメリカの大学院にいたおりにいくつかの大学の建築学科の作品展やキャンパスを見に行く機会がありました。一般的にアメリカでは、大学のキャンパスはそれが一つの街



です。広い芝生や樹木の間に点々と建物が散らばっているのですが、やはり各大学によって独特な雰囲気があります。ハーバードのように優れたデザインの建物がたくさんあるところでは、学生の作品も造形美を主眼にして、各個性のぶつかりあいを感じます。イエール大学も同じような傾向を持っているといえるでしょう。対してＩＩＴやＭＩＴの学生の作品はいかにも論理的で工学的にもしっかりした表現が見うけられました。（面白いことに建築模型の人間の表現がねじり紙で、ほとんどの学生が同じ表現）をしているのでたずねたところ、ある日本人学生が考案したものを、以来使っているということでした。）やはり伝統で裏打ちされた環境は強い影響力をもつものだなと思ったものです。

建築を勉強する過程において、デッサンが模倣を通じてデザインに興味がわいてくると



思うのですが、空間デザインに始まり、ディテールデザインにいたるまでデザインの範囲は非常に広いのです。自分のデザインは数多くの作品の情報を通じて、収集選り分けの結果、自分なりのものを造っていくのだと思います。その過程において自分の所属していた環境は、その情報選択に有形無形の影響をおよぼしています。

デザインというのは、古代から延々と残されてきた先輩たちの遺産の上に成り立っています。建築の芸術性のゆえに工業生産的なものとは違う模倣と独自性の問題がおこってきますが、部位としては同じようでも全体として考えた場合、独自性は必ずあると思います。すなわち個々の積み重ねられた環境が違っているのですから。環境というのはそれ程強い影響力を無意識のうちに人のデザイン形成に与え続けるものだと思います。

（アール・アンド・エス設計工房主宰）

な　じ　む

平岩　保

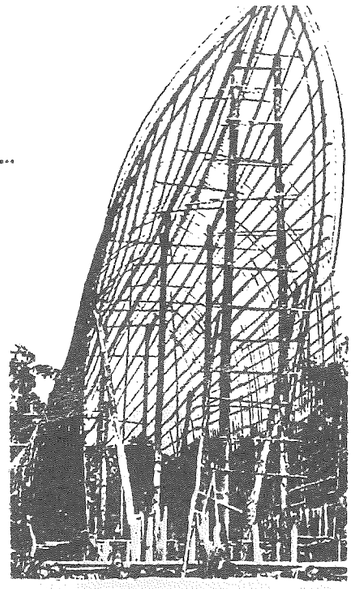
五重塔は完成してから木組が瓦の重みや自然にもまれプロポーションが落ち着くのが五百年、それからさらに五百年もつと言われている。木自体の素材でいえば、着色しない限り、できたときは白木で、例えば、現在の離宮のあの黒ずんだ木目による美的感覚は、創った人の本意ではないと、篠原一男は、時間の二元性を指摘したが、それでもなお、美しさは損われているわけではない。コンクリートは日本の場合、雨が多いため、外部は、出来上がってまもなくがきれいで、時間とともにそれ以上になることはない。

それにつけても、デザインが消費されてしまう現在、五百年といわないまでも五年すら待てない。打放しなどまだいい方で、できたその瞬間さえよければという建物が多すぎる。

現在は、髪型も多種あり、そうでもなくなったが、7、3分けなどきちっとした整髪が主流のころは床屋さんへ行くと仕上げにドライヤーでバチバチにセットされた。

家へ帰ってから鏡をみると、きちんとはなっているが、何か顔になじんでない。一週間ほどしてやっと落ち着きがでてくる。

レンガとか銅板とか瓦とか、時間とともに味わいがでてきて、建物自体落ち着きがでてくるが、ネオパリエとか金属パネルはメンテナンスを怠ったら最後、プールを上ったおさんの顔になる（もっとも最近では、小谷実可子さんをみてもそうだが、落ちないやつもあるみたいだけれど）。吹付けにいたっては、



よごれるのを待つだけだ。もっとも、漆喰は時間とともにきたなくなるが、はしごをかければ塗り直せるスケールで、安くはないにしろ職人が豊富にいてバックアップができていた。

年の割りに枯れた話ばかりになったが、枯れるといえば、肩ひじばって表現が先走り過ぎてギラギラしているのは、よくいえばパワーがあり、悪くは若さゆえと言われる。これは、その人の内面で、まだ建築とのなじみの度合いが少なくないゆえであろうか。

時代に影響を受ける感性（流行に迎合するとは言いたくない、このいじらしさ）ゆえいたしかたがないけれど、五重塔や緑青のように自然に犯されはするが、それでもって、己を護り、なお美しさを出す銅のように、そして何よりも人の心になじんでいけるような表現ができたらと思う。

それにしても街を歩くと、いたるところで道路をほじくり返しているが、デザイン博は「まち」になじんでいけるのだろうか、人の心には……。

（三共建築設計事務所）

建築家への期待

新しいJRにふさわしい設計の基本思想をつくる

ＪＲ東海取締役社長須田寛さんは昭和６年生まれ。新生ＪＲを背負って猛烈に忙しい。長身で飾らぬ気さくな人である。

話は須田寛さんの厳父、須田国太郎画伯の想い出話からはじまった。須田国太郎画伯は独立美術協会に属し、芸術院会員に推されたわが国の画壇を代表する画家である。そしてインタビューは、建築家の資質、能力、期待へとはずんでいった。

東海旅客鉄道㈱取締役社長

須田　寛 氏に聞く

インタビュアー　鋤納忠治

●鉄道へのあこがれから

――御多忙のなか時間をさいていただいてありがとうございます。

いま、わたしどもの建築を設計するもの、設計を専業で営む設計事務所とゼネコンの設計部がありまして、その専業の設計事務所の建築家の職能団体として昨年「新日本建築家協会」という団体が、丹下健三さんを会長に発足したわけです。わたしどもは、その東海北陸支部に所属していまして、今度、機関誌を発行しました。そこで、11月号で須田社長のお話をうかがいたいとおもってお邪魔したわけです。以前、須田さんから建築家を志したことがあるようなお話を聞きましたので、建築家のこと、建築のことなどについてお考えになっていることを聞かせていただけたらと思います。

須田　私は、新制大学の最初の卒業なんですよ、本当は。１年大学で留年しているから昭和29年卒業になっていますが。

昭和24年に最初の新制大学の募集をした時に、当時は国立一期校と二期校を受けるのが常識でしたから一期校は事務系の学部、二期校はちょっと変わったというとおかしいのですが、京都繊維工芸大学の建築科を受けたんです。

私は、鉄道へ入りたかったのです。それで事務系でなければ技術系になるんですが、当時は鉄道屋になろうということになると京都繊維工芸大学では建築科ぐらいしかありませんよね。ほかに窯業、染色もありますが、そこでは鉄道と関係がありません。それで受けたんです。それに父が京都繊維工芸大学や京都大学の講師をやっていまして、割合に建築科って親しみがあった。そんな経緯はたしかにありました。

――小さい時から鉄道には興味をもっておられたわけですか。

須田　そりゃ、子どもの頃はだれでも鉄道が好きですよね。そんなに深く意識したものではございませんけどね。終戦になって混乱状態にあった時、当時の国鉄はちゃんと一貫した運行をつづけていたわけですから、安定感といったらおかしいですが、信頼感が当時の国鉄にあったと思うんですよね。そういうものと鉄道が好きだということが結びついて国鉄に入ろうと思ったわけです。やっぱり鉄道が好きだったというのが、大きな就職の理由だったかもしれませんね。

――事務系を選んでおられる方で、そういうふうに小さい時から夢を実現させている人は割りと少ないんじゃないかと思いますが…。

須田　まあ、夢というほどのことはなかったんですが、国鉄に入っている人間にはそんな人も多いですよ。だけど、どちらかといえば鉄道に情熱を燃やしているのは機械系統の技術屋さんに比較的に多いような気がします。もう鉄道が好きで好きでたまらなくて、模型を並べたりしている人は機械系統の技術屋さんのなかにいますね。

●門前の小僧で絵を描く

――子供の頃は、当然、絵を描かれましたか？

須田　ええ、これは完全に門前の小僧でございますから。小さい時、本当に小さい時は描いていた。小学校へ入る前後に油絵を書いていた記憶がありますから、まあ描いていたんですね。ところが、その頃の油絵は親父に言わせりゃ悪くなかったですよ。小学校の当時は図画の教育は手本を移すという教育ですよ。尋常小学校図画手本ってご存じでしょうか。きれいな絵が描いてあってそれを模写させるのですよ。それを写している間に絵がいじけてくるわけです。そんなのでは専門の絵かきにはなれんからやめた方がいいと親父に言われたのです。絵画を簡単に考えているかも知れないけど絵で食っていくのは容易ではない。絵で食っていけるのは非常に少ない。ほとんどの人たちは副業で絵を描いているのだとね。

だから、かなり早くから私は絵かきになろうとは思わなかったです。門前の小僧で絵を描いていたけれど門前の小僧だけに早く見切りをつけたのかもしれませんね。

――私は昭和29年の京都工芸繊維大学の卒業ですけれど、一年生の時は霜鳥之彦先生、二年生が須田国太郎先生、この一年、二年が必須科目に絵画があるのです。それから三年生になりますと、また霜鳥先生、四年生は須田国太郎先生で選択でした。須田先生は謹厳実

直な先生で……。
須田　光栄でございます。大変真面目な人でしてね。うちで絵を描いていた時もネクタイをはめて背広を着て畳で正座して描いていました。昔の人ですから、行儀がよかったのでしょうね。
――学生に対してもきちっとされていました。
須田　かなりきびしかったんじゃないですか。私もよく怒られましたから。
――きびしいと言いますか、甘いところは全然ありませんでした。
須田　そんなことで、結局、建築を職業とすることにもならなかったし、絵かきにもならなかった。ただ、戦争中のああいう教育では絵かきは育たないと絶えず親父は言っていました。要するに型にはまった教育、しかも昔のものを真似る教育ですね。そういう教育では絵かきは育ちにくいということなんですよ。
――須田国太郎先生も京都大学の哲学を出ておられますね。
須田　美学です。学者になろうと思っていたらしいですね。哲学科の美学美術史専攻ですからね。聞くところによると大学院へ行って研究室に残って研究者になろうとしていたらしいですよ。しかし、絵が好きだったから、それをある段階で職業にしようとおもって絵の道に変わっているのですよ。絵かきとしてデビューしたのは40歳をこえていますから、しかも70歳で死んでいますのでね。絵かきとしては非常に短いですね。だから絵の数が少ないですね。稀少価値だと言われるのは、絵が非常に少ないからです。
――そうですか、それとやはり長時間かけてお画きになるような絵でしたね。
須田　ですから職業的意味で採算のとれない絵かきでしたね。非常に貧乏な生活でした。親父はとうとう画室をもたないで亡くなっています。プロの洋画家ですよ。自分の画室をもたなかった画家というのはあまりないではないでしょうか。だから普通の４畳半の南向きの部屋の座敷で絵を描いていました。
　一つの絵を描くには時間がかかるので、今でいえば生産コストがかかるわけです。私は親父が絵で生活するのは容易ではないということがよく分かりましたね。
――建築家の仲間では、絵が好きで絵では食えないぞと言われて建築家になったという人はわりといます。
須田　建築の学校を出た人は、みな絵を描きますね。余技で絵を描いておられる方も多いのですね。

●公共建築の設計思想

――昔は建築学科を出ますと設計の優秀なのは設計事務所へ入りました。最近は安定志向で大きい会社へ入ってそこで設計をやりたいというようになりました。しかし、ゼネコンは工事をやって儲けるところですから、設計部というのはどうしてもサブの扱いになります。学生の間にはそういうことが分からないのか、ゼネコンの設計部へ行くのが多くなりました。

インタビューする鍬納忠治氏

　日本では昔から設計施工で発注するケースが多いですが、アメリカ、ヨーロッパでは建築家という職能と工事をやる職業ははっきり分かれているんですけれど……。
須田　国鉄は建築という一つの部門がありまして工事の部局とは別に分かれています。二つの分業体制ができていまして、建築の人が設計したものを工事局に渡して工事局がそれを施工する。あるいは部外の工事会社にやってもらうというシステムになっています。比較的、優秀な建築家の人材がそろっていたような気がするんですけれどね。
　郵便もそうでしょう。駅舎とか郵便局とかの公共建造物は一つの独特な流れがあったと思うのですよ。
　たとえば、この名古屋駅は昭和12年にできた建物ですが、これと昔の郵便局の建物とは基本的な設計思想が非常に似ていますよね。私は昭和10年代から20年代に公共建造物の一つの設計思想みたいなものが出来ていったという気がしますよ。名古屋には戦前の10年代にできた市役所、県庁がございますでしょ。あれは、この名古屋駅と同じ世代の建物ですよ。外観は全然違いますが、間取りとか内部のいろんな造作なんかは非常に似ています。公共建造物の設計思想をつくる上に鉄道の建築家は非常に大きな力があったんだなあ、と私は思っているのです。
　それからもう一つ、国鉄の車両、電車、汽車に建築家の意見というのがかなり入っているのです。仕事の上でそういう分担はないのですから、非公式なかっこうでですが――色彩ですね。戦後とくに建築家の専門の意見を聞こうという空気が非常に強くなって現在のような色ができているのです。
　それと戦前の建築屋さんは非常にユニークな設計思想をもっていまして、長野駅、あれはお寺の格好をしていますよね。奈良の駅は、仏塔といいますか、お寺の塔ですね。中央線の大月は山小屋となっています。地域に密着した駅にするために地域でとくに設計し面白い駅にしているのですね。そうかと思うと、この名古屋駅みたいにスケールの大きな現在でも別に見劣りのしなものを立派につくっています。建築系統の専門家は鉄道では、それなりの業績をあげてきたのではないかという気がするのです。

●ＪＲタイプの新しい建築

――おっしゃる通り逓信省の建築と国鉄の建築はやはり官庁建築のなかで大きなウエイトを占め、大きな役割を歴史的に果たしてきたと思いますね。
須田　今の東京駅の前にある国鉄本社の旧館が昭和13年、名古屋駅は昭和12年ですね。いずれも官庁建築では傑作といわれている建物ですが、50年以上経っている。いずれ壊さなければいけない。壊すにはちょっともったいないような感じがします。昔の建築の先人はなかなか立派なものだったと尊敬の念を禁じ難いですね。ただ、鉄道のような大きな土木工事のスケールからいきますと、建築は比較的小さな分野なんですね。したがって割合に発言力が小さいというか土木技術の中に埋づもれてしまっている面があります。非常に小さいけれどユニークな仕事が多いですね。
　ただ、最近はね、国鉄も赤字経営になって建築も画一的になってきました。一つの設計思想というのが確かにあるんですけれど、それを大きくしたり、小さくしたりするだけでね。いわゆる標準設計みたいなものがありまして、どこにでも同じようなものができるんですよ。
　橋上社屋というのが最近はやりましたね。駅の表と裏があったりするものだから、駅舎を線路上にあげましてね、両側から階段でアプローチして改札口を真中におくというのです。このへんですと東刈谷、新幹線の三河安城がそれに近い設計なんですが、非常に画一的な設計になっていますよ。昔にくらべれば効率的になっていますが、やや面白さがなくなっているなあという気がします。
　ちょうど、ここへ来て民営となってＪＲ東海のほか、いろいろできましたから、今度は会社のカラーを出そうと建築屋さんが燃えているんじゃないかと思います。
　これからのＪＲ、官庁建築ではないＪＲタイプですね。官庁建築を脱皮して新しいものが生まれると思うし、それを期待します。ＪＲも人材が少ないですから、建築出身の人に関連事業本部の部長をやらしたり、なかなか本来の建築屋さんとしての仕事に専念できない悩みがありますけれど。
　そこで建築技術者を新しく採用して新しいＪＲの新しい建築思想をつくってもらわないと、官庁建築ではやはり具合が悪いと思っているのですよ。
　それにいままでみたいに画一的な駅ばかりつくっていたのではお客さんのニーズを満たしませんからね。
――電信電話公社もＮＴＴとなり、国鉄もＪＲになりました。ここでの建築屋さんは従来はわれわれの建築家協会の会員にはなれなかったのですが、今度は民間ですから独立した設計事務所として新日本建築家協会にも入会できるようになりました。そこで、民間の設計の仕事も受注しようというお考えもあるやに聞いていますが……。
須田　一級建築士事務所というのが開けるのすね。私どもの玄関にも一級建築士事務所の登録票があります。そういうのを開設すれば、私どもの仕事だけではなく一般のコンサルタント的な業務もできるし設計受注もやれるわけですね。
――私どもの競争相手に……。
須田　まだ、とてもじゃないけどそんなね（笑）。大建築事務所をおびやかすような能力はありません。むしろご指導いただかなければいけませんし、そんな大それた力を発揮する時期ではありません。

●名駅は名古屋のシンボル

――設計事務所がなぜ生き延びているかと考えますと、要するに儲かる商売じゃないというところにあると思うのです。これが儲かる商売ですと病院のように資本をもった人が医者をやとって病院を経営する。いまのところ、大企業が経営して設計事務所で儲けたという話を聞いたことがありません。
須田　やっぱり芸術と一脈通ずるところがあるのでしょうね。
　ただね、私見ですけどね、いろいろ非公式ながら建築にご縁があったことから申し上げますと建築家は建物を設計するということにこだわらず、もっと広い意味でコンダクターであり、インストラクターであってほしいという気がします。建築家は芸術的なセンスをもっているわけですよ。これは絵を描いているわけですから。それから数学的な科学的な緻密なものももっているわけです。それに評論的な見方も建築家はもっています。建築家イコール評論家だとさえ思うような人も中にはおりますでしょ。そしてまた全体としての土木技術と関連した知識をもっている。したがって幅の広い知識を建築屋さんはもっていると思うのですよ。
　私はうちの建築屋に建築技術者にこり固まらずにもっと幅の広いＪＲ東海という会社の設計ができるようにスケールの大きな仕事を期待したいと思っているのです。
――建築家は見方が狭くて、ある殻にはまっていると思いますし、そこから脱け出せる人はなかなかいないですね。
須田　抜け出る人は非常にスケールの大きい抜け出し方をすると思います。国鉄時代、社会的に有名になった人はみな建築屋なんですね。トイレット部長という人いたでしょう。
――ええ藤島さん。
須田　あの人は建築家ですよ。あの人は鉄道管理局長もやりましたけれど、あの人を有名にしたのは設計ではなくて評論的活動なんですよ。トイレット部長というのは藤島さんの書いた有名な著書の名前に過ぎません、あの人は評論家なんですよ。あと馬場さんという人がいましたが、この人はすばらしく大きな都市設計を提案して有名になった工学博士なんですが亡くなりました。丹下建三さんにしても建築の設計以上のことをやっていますよね。日本の国のプロデューサーみたいなことをやっていますね。ああいうことをやれる人は建築家だけじゃないかと思うのです。
――そうなると希望が出てきますね。でもやっていることは細かいです。
須田　私ども一番大きな建築のプロジェクトは、この名古屋駅の建物を建て替えなければいけないというのが一つあるのです。何年先になるかわかりませんが、名古屋のシンボルにふさわしいものをつくりたいという大きな夢をもっています。建築屋さんにとってはこれから腕をふるってもらういい場所だと思うんです。建物の設計にこだわらず町を設計するという気持ちでとりくんでもらいたいと期待しているのです。

略歴
須田　寛（すだ・ひろし）
昭和６年１月28日生まれ
昭和29.3　京都大学法学部卒業
昭和29.4　日本国有鉄道に入る
昭和41.6　名古屋鉄道管理局総務部長
昭和43.2　中部支社投資管理室長
昭和44.2　旅客局調査役
昭和44.8　同設備課長
昭和45.8　同調査役
昭和46.3　同営業課長
昭和49.8　同総務課長
昭和54.5　名古屋鉄道管理局長
昭和56.7　旅客局長
昭和59.1　日本国有鉄道理事（62.3.31満了）
昭和62.4　東海旅客鉄道㈱代表取締役社長

唐草文様からアーバンデザインへ ②

林　英光　愛知県立大学助教授

東京芸大の学生の頃、「構成原理」という授業があった。それは実技としての演習ではなく学科の講義であったが、それほど論理的な内容ではなかった不思議な授業であった。講師は水谷先生でヨーロッパ帰り風の雰囲気をいくぶんただよわせたぼくとつとした語り口で、バウハウスのことやモホリナギーのことなどを紹介し、構成というものが美術のものづくりの基礎であるような話をして下さったと覚えている。

私が昭和36年に入学した頃の芸大は、上野の森の名に恥じない椎の大木と古い寺のような木造の本館と、ヨーロッパのシャトーを想わせるトンガリ屋根の木造二階建ての図案棟がまだあった。その二階のはずれの大部屋が我々の教室であったが、建物の老朽化のため大勢が一ケ所にあまり集まることのないよう注意があった。そこでデザインの基礎実技の一つとしての構成の課題があった。B２のケント紙に無彩色で四角形や三角形を使って構成したり、金魚鉢の泳ぎまわる金魚を毎日スケッチして、無彩色のポスターカラーで表現するといった課題に取り組んだ。ただ金魚を無彩色で描くのではなく、与えられたスペースの中で生物の動きや形態を観察し、モノクロームの階調の変化と共に余白のスペースとの関係で美的感覚に訴えるなにものかを表現することにあったようだ。結果はかなり年経た浪人や現役入学者が入り交じった中で、自分の作品は中より下だなあと思え、都会っ子のシャレたメリハリのある抽象的な構成に比較し、千葉の田舎くささが抜けない平凡な表現だったと後悔した苦い思いを覚えている。単なる絵の具のグレートーンの構成で、形の変化と面積比の問題だけなのに、ある学生の仕事はかなり奥の深い味わいを表現することに成功しているように思えた。

ものづくりの基礎として平面の紙の上で、与えられたスペースの中で最も完璧な構成をする訓練は単純かつ奥深いものである。実際の日常生活で見るもろもろのものはすべて紙やブラウン管の平面上で同様に練り上げられ、その結果、形あるものとして存在することになる。大自然や神はそんな平面上での作業をしてから万物を創ったとは思えない。特に日本人の日常の生活環境に表われてくるあらゆる商品、製品、構造物はおおむね平面的、一面的で魅力に乏しいのは、立体や空間としての訓練が不足していることもあるが、徹底した平面上での追求が不十分のまま作り出された結果だからではないだろうかと思う。完璧なまでに平面上での追求が進むと、次のステップとしてどうしても立体として、空間としてできあがったことへの想いやイメージがいやおうなく高まり、ふつふつと目前に完成した姿が浮かび上がり、それが実物として世に出た時の不安や期待感が交錯するようになる。最近の仕事は多くの分野を見渡してもそこまで描き込んだエスキースや図面が感じられないものが多いように思う。軽薄短小の時代かも知れないが、やはり何かものたりないように思う。

ギリシャのアカンサスの葉から出発し、シルクロードを経て日本の唐草文様となる

平面がすべてである絵画やグラフィックデザインの場合でも、その限られた枠の中だけでなく、その周辺へおよぼすオーラのような力が大切で、あたり一帯に、ある種の快い緊張感をもたらす作品は良い。単なる平面が室内や建物をも上まわるスケールで存在するものになる。20才代に一ケ月ほどヨーロッパの美術館を巡ったことがあり、その時初めて、本物のボッティチェルリやルーベンスに出逢って、今まで自分が日本で見てきたものは絵ではなかったのだと感じ、一日中感激の涙が止まらなかったことや、あの量感のある美術館の建物より大きく偉大にさえ感じた絵に出会って芸術の意味を改めて強くかみしめたりした思い出がある。

どのような訓練の過程を経たり、才能をもっていると、空間デザインにもっとも近道なのか時々考えることがある。自分が学生時代に受けたデザイン教育は、卒業した当時は何一つデザイン教育らしいモダンデザインの授業は無かったように思われ、芸大のあり方に不満を持っていた。ところが今になってスペースデザイン、環境デザインを仕事としていると、いまさらながら伝統的な美術を教えられたことに感謝している。簡単に言えばほとんど伝統芸術に終始したと言っても良いほどであった。人体デッサン、彫塑を三年次まで、日本画では鳥獣戯画や平等院の天井画の模写から没骨法の表現、陶芸、木工、漆工、鍛金、彫金、飛鳥、奈良のいにしえより伝わって来た鋳金。そして図案の基礎である色彩、立体の構成であった。

それを思うと今のデザイン教育は即物的で根が浅くなって来ていると言える。

特に今でもまざまざと目に浮かぶ授業に、デザイン概論があった。主任教授がぼそぼそと話し始めたのは唐草模様の話であり、我々一年坊主が期待していた近代デザインより二千年は古い話題であった。唐草文様の構成は完璧に近いデザインの真髄であると言いながら、黒板に渦巻状の形を描き説明して行くのを唖然として見ていたのであった。しかしその成果は10年、20年経つうちに少しづつ表れて来ているから不思議である。あの渦巻状の植物の抽象化された形態がうねりながら、ある種の強い造形性を維持しながら空間を自然に埋め、どこまでも発展して行く力の流れや方向の必然性を思うとき、シルクロードをはるばる日本にまでたどりついた悠久な造形の生命力を感じることができる。

都市に明日はあるか

〃未開と文明——沖縄と本土〃

建築家　広瀬一良

未開と文明、一見仰々しいこの命題は借物であり、来年11月ＪＩＡ大会の名古屋開催に合わせて行われる名古屋都市デザインセミナーのメインテーマである。そして極めて明快で極端な対比を暗示するこの言葉を、素直に受け入れることには多少の違和感を覚える。しかし、強力な資本組織に政治ぐるみ支配されている今日の社会に生きる私たちにとっては、不思議な魅力となって迫る言葉でもあろう。

文明の私たちに対する使命は、人間を含めて地球上のあらゆる生物が、現在もそして未来永劫好ましい状態を持続し、発展することを目的にしなければならないはずである。しかし、文明は人類を含むすべての生物に対して、すでに不必要な領域に踏み込み、テクノロジーという神話の名を借りて一人歩きを続けようとしている。そして私たちはその事実を肌で感じながらも、そのまま見過ごしているだけである。

私がこのように現代文明の対極に身を置いて向かい合ったのも、昨年沖縄の石垣島の離島竹富島を訪れ、そのアノニマスな土着性から受けた強烈なカルチャーショックによる影響が大きい。そして島に保存されている琉球民家の間取りに、ハレの間（表座）とケの間（裏座）が南北に配置され、表の２番座には必ず南面して大きな仏壇が祭られていることに不審を抱いたのが、琉球の土着性と精神文化を探ろうとしたきっかけとなった。

沖縄は地理的にも伝統文化を残しやすい条件を備えていたのは確かである。それは 700 kmにわたって展開し、お互いに相当の距離をおいた孤島群であるため、たとえ他からの文明的移入があったとしても、それを統一するだけのエネルギーを持ち得なかったと思われる。したがって沖縄的な共通項を有しながらも、それぞれの島が独立した歴史、文芸、家内的特産などに強い土着性を持ち、たとえレジャー産業が一地域を開発しても、それは島の経済を多少うるおす程度であり、島全体にしみついた精神文化を破壊するほどの力にはなり得ない。そして、この強力な土着性を支えるものは、沖縄全島に今なお残影の濃いニライ信仰と原始宗教的な祖霊信仰であったことを沖縄文学の論文で知り、あの竹富の琉球民家の謎が解けたわけである。

また、祖霊信仰の論文の中で著者が文化人類学者レヴィ・ストロースの未開と文明の連続性とか、構造主義による地縁・血縁の分析を参考にし、はては来年私たちが都市デザインセミナーに招待を予定しているイヴアン・イリイチによる現代文明の病根（産業化社会——制度化社会）に対する考察がなされているのには驚いた。また同著者が最後に沖縄独特の自然宗教を、現代科学の暴走をコントロールし、その成果を民衆の知恵の中へ奪い返す精神的支柱として研究を続ける、と結んでいる言葉に思わず静かな興奮を覚えたのである。

いまだに原始宗教の流れを残している沖縄の精神文化とは何だろうか。米軍の基地内にあるウタキ（拝所）に、ネットの外から祈りを捧げる島人の心を占めるものは何だろうか。沖縄文学の中で土着の宗教、歴史、文芸を追究する執拗さは何だろうか、私の心にわだかまる疑問は尽きない。

都市への提言

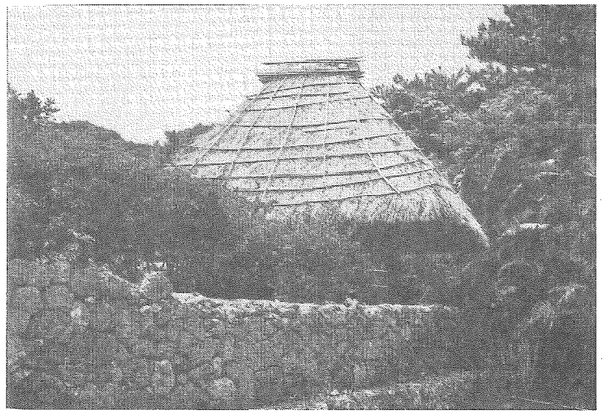
沖縄もやがては（すでに受けてはいるが）本土の大資本による、さらに大きな収奪の場となるであろう。しかし、それは上辺だけのものであり、15世紀の頃から多くの国と接触しながら築き上げた孤島文化は、短期間に消滅するとは決して思えない。それはたかだか明治以来 100年の間に伝統文化を消し去り、本土を支配した表層文明とは異質の自律性をもっているからである。そうした意味では沖縄はしたたかな未開であろう。

未開と文明を対比する時、今日の文明が人間にとって好ましい状態におかれることを阻害する要因となれば、批判され訂正されるべきであり、またその時点で人類学的に見ても文明は自律性をうしなったものとして未開に及ばないことになる。

ひるがえって本土の社会状況に目を向けよう。“水俣”によって代表される工業汚染のような社会問題は、経済優先の日本の恥部として国際的に摘発され、その後も監視が続けられて一応文明国としての体面は保たれたようである。このようにはっきりと結果が目に見えるものは、行政もその対策を取らざるを得ないし、国民も行動することができる。しかし、私が勝手に第２次汚染と名づけているような、私たちの意識の外にあって人知れず私たちを管理し、その自律性を妨げている一種の体制化された要素に注意する必要があろう。

土地価格の狂乱も目に見える状況ではあるが、それを抑制することができない政治の裏には、強大な資本との連りという現象がほの見えるはずである。特にある地域を代表するような大都市では、そこに集まるべくして集まり、その都市化を誘導する体制的な要素が必ず存在している。

東京都は表向き日本の巨大な管理都市では



琉球の高床倉

あるが、逆に政治、経済、産業、教育、情報などの肥大化した体制組織の中枢に、管理されているように私には見える。今、国会で起きているリクルート問題は氷山の一角として、それらの影響が政治家の良心と社会通念まで麻痺させることになった好例であろう。

いずれにしても東京を管理都市とすれば、さしずめ大阪は商業都市として、都市発生の過程から見れば中世的な感覚で、やや遅れてはいるが隠当な姿を保っていると言えよう。しかし管理都市（たとえそれが他の要素に管理されているとしても）のように強力な支配力に欠けることはやむを得まい。

さて頭記の通り名古屋市では1989年11月16日を期して名古屋市、ＪＩＡ共催で“未開と文明（都市と環境　自然と人間）”というキーコンセプトをもとに、都市デザインセミナーを開くことを決定した。

“都市”はすでに数十年前からその発展の過程、支配する階級、政治、経済、産業などの構成要素と、それによる都市化現象と市民とのかかわりの分析について、多くの哲学者社会学者、人類学者らの好個のターゲットとして論じられてきた。そして現在“行き過ぎた文明”と“自然なもの――市民の都市への権利”との相剋は、さらに激しさを増している。

幸い名古屋市では管理都市化現象が他の大都市ほど進んではいないように思われるので（それが大きな田舎と言われるゆえんでもある）、この時点で名古屋市の現在、未来の好ましい概念的な姿を探り、それを可視的な都市像として投影しようとする試みは、時宜を得たものと言えよう。少なくとも出発点から可視的なものを手がかりとした従来の都市デザインの手法に比べれば優位に立つと確信される。

講師予定者のイヴアン・イリイチ氏は教育の学校化をも批判する哲学者であるが、学校化どころか教育の産業化を平気で実践している日本の現状に驚愕するに違いない。また日本側のスピーカー梅原猛氏も現在の都市化現象に対して厳しい文明論を展開されることであろう。いずれにしても産業（技術）の中枢的役割を目指そうとする名古屋市の立場は強く批判され、また、それなりに分析されることになる。その結果こちらの思惑どおりソフトとハード、未開と文明の中間的な都市概念が生まれる可能性がはたしてあり得るだろうか。私は関係者の一人として大きな期待と不安を持ち、また、それを探り出さねばならないと思っている。それが誇り高き“未開の文化”を現在も持ち続けている沖縄の現実に程遠くとも。

職業としての建築②

建築家の出現と役割の分化

瀬　口　哲　夫
豊橋技術科学大学助教授

1．細分化する職能

社会が発達してくると、建築家の必要性が増してくるというわけである。さらに社会が進むと建築家ばかりか、それ以外の専門家も必要になってくる。日本の現状を考えてみてもこれは容易に理解できる。電気技士、機械技士、積算士、インテリアデザイナー、構造技士、造園家という具合である。英国の場合で、日本と違う職種としては、テクニシャンとビルディング・サーベイヤーがある。ビルディング・サーベイヤーという名称は、クォンティティ・サーベイヤー（積算士）と似ているが、後者は見積りをするのが主な仕事であるが、前者は建築の修繕工事の設計等にたずさわる人で、仕事の内容は建築家のそれによく似ている。これは古い建物が多く、もっぱらこうした仕事をする専門家が形成されたということであろう。

テクニシャンという名称も日本では目新しいと思う。イギリスで、ある人を紹介された時、「彼はテクニシャンだ」と言って紹介されたことがあった。その時、とっさにどういう職種の人か理解できなかった。設計事務所などで、建築家の下にあって建築図面をひいたり、詳細部の図面を作成している人がこれにあたる。建築家の資格をとることをあきらめた人や最初からこの分野の仕事をしようと勉強した人がなっている。アメリカでドラフトマンという呼び方があるが、テクニシャンはこれに似ている。日本では実態はともかくこういう形で職種が分かれていない。英国の場合、建築家という名称は勝手に使用できない。したがって建築家の資格がなくて、建築の図面を引いたりしている人の階層が形成されてくることになり、これが結果的に一つの職種を形成しているということになっている

日本の設計事務所で働いている人で建築士の資格をとらない、あるいはとれないという人は、どのような扱いになっているのだろうか。他の所員とほとんど変わらない待遇で仕事をしているとすると、それぞれが横断的に集まって職種を形成することもないのかもしれない。英国では資格がものを言うので、建築家の資格がなければ、それだけの仕事をはじめからやらせてもらえないし、待遇も違う。

したがって、テクニシャンとしての仕事の範囲を定め、仲間でかたまる必要もあるというわけである。こうして建築家のみならず、社会が複雑化することで多くの専門家が建築をつくるのにかかわってくることになる。

2．専門領域をもつ建築家

こうした流れとは別に最近では、建築家自身もそれぞれ特徴をもってきているという。「建築家の多くはむしろ仕事上１～２の領域に特化してきている。一般的な分け方でいうと、病院、住宅あるいは劇場といった建物種別によって分けることができる。アメリカではこうした分け方に対し、デザインコンセプト、建設業者のための情報、現場監督というような設計プロセスで建築家の専門が分化している。三番目の分け方としては、建物の欠陥に関する専門家、建築模型の専門家という分け方がある。これはどのような特別のサービスが提供されるのかという見方での分類である。近年ではソーラー・エンジニアとかアーキテクチュラル、コンピューティングという新職種も見受けられる」（注１）

日本でも、大きな設計事務所などでは、それぞれの課が専門とする建物を持っていることは知られているし、ホテル中心、病院専門といった特定の建物の設計に特化した設計事務所も見られるようになった。これに対してアメリカでみられるという分け方、つまり設計のプロセスでそれぞれ建築家、あるいは設計事務所がわけられることは多くないのではなかろうか。それでも施工図を専門に引き受けている設計事務所とか、基本アイデアを出すことを専らにしている設計事務所、この場合はコンサルタント事務所の方が多いかもしれないが、設計プロセスに対応した形での職能の分化のきざしはある。こうして見ると十人十色というように、建築家も十人集まれば、それぞれ異なるといえる。

3．スペース、コンストラクション、プロジェクト・マネジャーの３つの領域を統べる建築家

「建築家は、スペース（空間）、コンストラクション（施工）、プロジェクト・マネジャー（監理）という三つの領域をむすびつける役割を果している。」（注１）

このあたりの認識は日本でも同じである。しかし、建築家の教育が、こうした三つの領域をむすびつけるようになされているかどうかは別である。英国ではどうなっているのだろうか。

「プロジェクト・マネジャーに関しての訓練は、建築家の資格をとるための試験のうち最後の段階であるパートⅢのイグザムを通してなされるようになっている。コンストラクションについては学生の時の実務訓練で教えられるようになっている。」スペースについては説明する必要はないと思う。

日本は大学を卒業して、設計実務を経験した後、建築士の資格試験を受けるようになっている。表面上は実務を経験するというプロセスはある。しかし、設計実務についても何ら規定はないし、どのようなことを学ばねばならないということも定めてはいない。建築関連の会社や事務所に勤めていればＯＫという実に杜撰（ずさん）な形になっている。設計事務所の運営の仕方から法規、それに関連する手続、税金等図面を書く以外のことで知らねばならないことは多い。それにもかかわらず、どこにも体系的なものがない。

英国ではこのあたりに、建築家の職能確立の基礎があると考えられており、建築家になりたい人はパートⅢのイグザムのために、自分の担当した仕事についての実に細かなレポートを作成し、提出しなければならない。こうした仕事について建築家が十分知り、デザインだけでなく、実務的にも依頼主に対しサービスをするというのが、英国の建築家という職能に対する基本姿勢である。日本では監理でお金をとるんだという考え方があるが、その裏づけがない。

英国の事情でもわかるように、建築事務所の運営を含めた監理については、学校教育には期待できない。建築士の資格試験とリンクさせるようにするとか、建築家の団体が自覚的に行動するしかないように思う。もちろん英国でもこうした基本方針に対し批判の声がある。それはあくまでも建築家の職能が空間を設計し、クリエートしていくところにあるという立場からである。これは建築家についての普遍的役割である。しかし、社会の変化について建築家の役割も変化している。次回はこれについてふれてみたい。

（注１）O,Burston「Careers in Architecture」

'89
設計事務所名簿
ー中　部　版ー

愛知・岐阜・三重・静岡

Ｂ５版　900頁
予　価　30,000円
発　行　12月

設計事務所名簿
'88東京都版
'88大阪府版
'89近　畿　版
'87関　東　版
'87設備設計事務所名簿（大都市圏版）

発　行　建築ジャーナル
名古屋市東区東桜１－１４－４５
電話　０５２－９７１－７４７７

佐久間達二先生訪問

いまだ現役のバリバリ

建築家職能を貫く生きざま ますます若く達者。引退するときは死ぬ時。

建築家佐久間達二さんが愛知建築設計監理協会会長を二期４年間つとめ、辞めてから４年になる。新しく生まれた新日本建築家協会の会議にも、ほとんど顔を見せなくなったが、建築家として多忙である。いまなおバリバリの現役なのである。

「佐久間先生ご機嫌いかがですか」などとのんびりしたことを聞くと叱られてしまう。建築をすることが佐久間さんの生きざまである。傍ら、大学講師もつとめる。建築家教育に携わるのも生き甲斐のひとつとなっている。この大学講師歴も1953年（昭和28）名古屋工業大学講師にはじまって、名古屋大学、愛知工業大学とひきつがれ、実に30年になる。「全国でもっとも長くつとめている非常勤講師ではないか」と佐久間さんは笑う。

ちなみに佐久間さんが郵政の係長の現職で名古屋工業大学の講師になった時のはじめての学生のなかに現在の愛知部会長栢本良三さん、副部会長の森鉦一さんの顔がある。

いかに長い歴史を重ねているか知れようというものである。

佐久間達二の名前が全国の建築界に大きく馳せたのは、近く取り壊される1952年（昭和27）の愛知県文化会館のコンペにおいて三席の栄誉を獲得したときである。

全国のそうそうたる有名建築家の参加するコンペにおいて36歳の郵政の一設計係長だった佐久間さんが三席に名前を並べたわけである。戦後の建築設計界の黎明期において佐久間さんの占めた地歩は大きかった。当然、この地方の建築家に大きな励ましと刺激を与えた。

もっとも建築家佐久間達二は、突然浮上したのではない。佐久間さんが少年時代、病床にあって工事中の東海郵政局を見ながら寄せた建築への夢と逓信省時代の上司、吉田鉄郎との出合いの歴史が素地にあった。

名古屋高等工業学校を1941年（昭16）、太平洋戦争勃発の年の12月、繰上げ卒業した佐久間達二さんは憧れの山田守、吉田鉄郎のいる逓信省営繕局へ勤務。かねてからの想いが実って吉田鉄郎のもとへ配属される。そこで勤務後、毎晩二年にわたって吉田鉄郎宅へ立ち寄り、吉田鉄郎と机を並べて昼間の仕事や吉田鉄郎が私的にうけた住宅設計や門扉のデザインなどを終電まで時間を忘れて手伝う。鉛筆の粉でひじが真黒になり、薄けるまでだまって図面を書いた。佐久間さんは、吉田鉄郎から実際の仕事を通して、いわば吉田鉄郎の後姿を見て建築を学んだという。

敗戦のあと、名古屋に還った佐久間さんが愛知県文化会館のコンペにおいて三席を得たことは、佐久間さんの歴史を知る人にとっては不思議なことではなかった。

佐久間さんは寡黙の人である。吉田鉄郎がそうであったように佐久間さんは多くを語らない。同時に佐久間さんは省略の人である。建築でも言葉でも冗慢なものを除いてエッセンスで表現しようと心懸ける。所員には自分の生きざまが建築家の姿であると示したいと思う。それだけに自分にきびしい。

零細なアトリエ事務所を主宰する佐久間さんが1978年（昭53）、日本建築家協会東海支部長に就任する。二年の任期を経て、1980年（昭56）、今度は黒川巳喜さんの後をうけ愛知建築設計監理協会の会長を引き受ける。しかも、二期４年にわたってである。

多くの人の目から見れば、佐久間さんの主宰する永設計事務所に大きな犠牲を強いるとなるのではないかと、気になるのが普通だ。

佐久間さんにそのことを聞くと「職能をめざしてパブリックな仕事を一生懸命にやることと事務所の仕事とは対立することではない。結局、同じことだ」と事もなげに言う。

佐久間さんが、建築家協会支部長、愛知設監会長時代は建築家にとって、環境のもっともきびしい時代だった。

建設省の後押しを得た建築士事務所協会が建築設計界の主流であるかのように君臨し、設計監理協会の会員は官公庁の仕事からは除外される、という噂がまことしやかに流された。同時に田中一参議院議員の議員立法によって「建築業法」案が国会を通るかのような状況にあった。この「建築業法」が国会を通れば建築士法の専業、兼業を区別しない現行法がそのまま定着し、建築家の職能は少なくとも国家レベルにおいて否定されることとなりかねない緊迫した状況をつくっていた。

それだけにこの時代の愛知設監の会員は燃えていた。建築家職能が国家によって否定されるか否かという危機感のなかにあって、かつてない職能意識を燃やしていた。そのエネルギーをうけて佐久間さんは国会まで足を運んだ。戦後はじめて建築家職能について衆議院建設委員会においてとりあげられ、質問がなされ議事録に記録された。これは戦前の貴族院においてなされて以来のことであり、画期的なことだった。

専・兼業をいっしょに組織する愛知県建築士事務所協会の設立の話がもち上ったのは1951年（昭46）のことである。事の重大さを訴えるために建築家協会本部の市浦健会長、圓堂政嘉職能委員長ほか役員が大挙して来名、名古屋で拡大職能委員会を開催した。そして愛知の会員に専・兼業を混同する建築士事務所協会の設立が将来にわたって建築家の職能活動をいかに阻むものであるか警鐘を乱打した。

その時の記録を持ち出してきて見せてくれた。佐久間さんは一冊のノートに克明にとっている。

佐久間さんの意識のなかには単なる作品主義の作家と異なるトータルな建築家意識が仕事を通して形成されてきているわけである。

だからこそ、およそ建築団体の団体長らしくない佐久間さんが六年間にわたって、建築家職能を求めて生命を燃焼させた。それは佐久間さんにとっては20代の頃、吉田鉄郎の家へ毎晩通って図面を引いた体験の延長のことであったようである。

最近の日常生活を聞いてみた。

朝起きるのは６時頃、それから新聞を読みテレビを見、食事をして依頼をうけた住宅のプランを昼まで自宅で練る。お昼頃、いったん事務所に顔を出し、打ち合わせがあればそれをすませ、自宅に帰り、またプランを深夜まで練り直す。

それが毎日の日課だそうである。基本設計には最低６ヶ月は費やす。幸いにそうしたクライアントに恵まれているという。いわゆる営業に費やす労力はまったくゼロである。昔ながらのクライアントの依頼があっての業務の着手である。純粋に建築に没頭できる環境にある。

大正６年生まれの佐久間さんは、今年71歳である。

年齢とともに建築の読みが深くなったという。建築家の仕事はまったく年齢とは関係ないとのことだ。

若い時に結核をやったお陰で、身体を適当に使い、休ませる方法を会得した。すこぶる元気だ。最近、眼球出血があり、身体が酸性になってしまうという病気になったが、びっくりするほどのこともなく休息をとってたちまち健康を回復した。若い頃は不治の病といわれていた結核に罹って癒ったというのも「建築」という魅力にとりつかれ、人生に目的をもったからだ、建築をやっていれば年をとらないし、健康にもいい。この話も徹底している。

来年は、永設計事務所は創立25年を迎える。久屋通沿いに佐久間さんが事務所を開設してから四半世紀を数える。

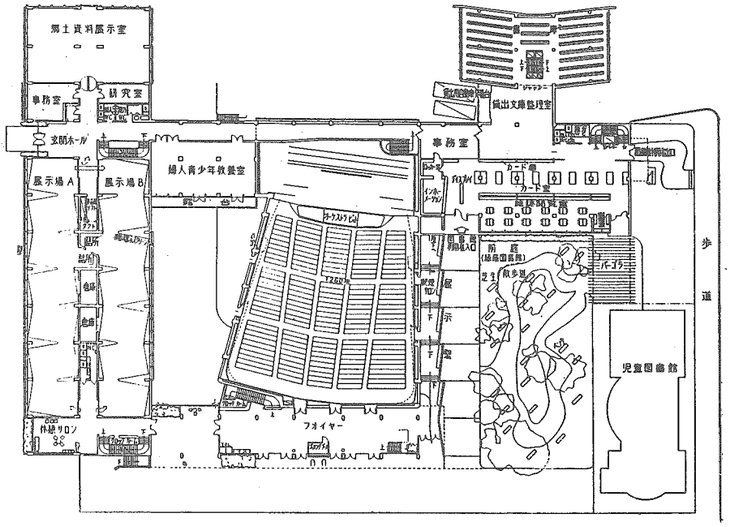
およそ飾ることを知らない佐久間さんだが、25周年にはいままでの作品をまとめて発表する構想をもっている。期待したい。

――佐久間先生の引退は、どうもなさそうですね。と聞くと、

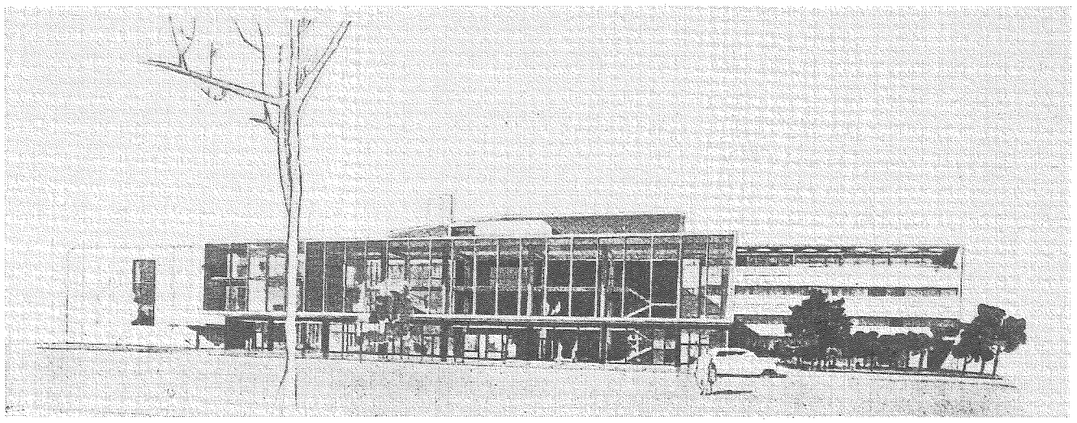
「それは死ぬ時だ」とさり気ない語り口で返ってきた。

いま、佐久間さんがもっとも熱心に見るテレビはニュースのほかにＣＭだという。「ＣＭは昔と違って、見落としてならない情報がインプットされている。昔はテレビを馬鹿にしていたが、今は熱心に見ている。」

佐久間さんはますます達者で若い。（Ｓ）



平面図



愛知県文化会館三等入選案

自然からの恩恵と発想

柳沢佐和子

建築計画連合主宰

父は、染色、陶芸など生活道具をデザインする工芸家、母もまた染色や糸を織る工芸家であり、生まれは大阪だが、その父の仕事の関係で小さい頃からかなりいろいろな所に住んだ経歴の持ち主である。

特にその中でも強烈な印象として残っているのは中国、北京大学で教べんをとった父について行った北京での3歳から4年間ほどの生活である。この時の経験が今もどこかにあって、グローバルな目、大陸的なものの考え方が身についたのではないかという。

その後、終戦をむかえ、苛酷な状況のもと京都へと引き上げ、小学校時代だけでも7回ほどの転校、広島、伊丹、福井などで高校までを過ごし、京都工芸繊維大学で4年間学生生活をおくる。

小さい頃から、あちこちを転々としながらも、その地域の生活にすぐにとけこんでいく力は、もって生まれた生命力だと感じる。山や川の自然のもと、両親からの影響も多分にうけながら、自ら遊び道具をつくりだし、ものをつくることの楽しさを自然に身につけていった。

生活の器として、建築をとらえていくという考えは、自然と結びつく造形としてとらえた時、工芸家と同じ発想、土壌に基づくものである。

学生の時、アルバイトをした東京の久米建築事務所で、今の御主人と知り合う。卒業後、東京の梓設計事務所で3年間勤務後、夫の柳沢忠さんの名古屋大学助教授着任のため名古屋へ定住と、移転をしながらも着々と現在の位置を固めてきた人である。現在、主宰する建築計画連合は、昭和51年に設立。12年ほど経過した今、名古屋にしっかり根ざした仕事を続々とやっていかれる。また公的な市の婦人問題懇和委員会の会長という大役までやってのける女性なのであるが、肝っ玉かあさん的なイメージはまるでなく、自然にその時その年代の感性と経験で、仕事を一つ一つ積み重ねてきたように思える。

特に今は、住宅と公共の病院の間に位置するような老人のための場所、在宅看護のできる家、二世帯住宅などを多く手がけている。また、新しい提案で、「ウッドリーム愛知」と称して、木材による大規模建築のモデルを、林野庁、県の木材組合のもとで設計している。これは、木を湾曲させて使い、従来の鉄骨を木にかえる新しい試みである。実際、国、県の援助のもと、愛知県民の森・催事場として、鳳来町に近々竣工される。全国でも9つほどの実用例しかなく、今後、どういう結果がでるか楽しみな建築である。

一貫して自然と建築・街の環境づくりとの関わり方、人間を含めた仕事上のまわりの環境を総合的にまとめあげていく大切さの話が非常に強く心に残る。

設計者である自分と施工者、施主の3つの個性のいいものをつくっていこうとする気持ちの高まりが、いい作品を生むという。これは、家族にも言えることで、それぞれの分担が一つにまとまった集合体であり、子供を育てることも、建築の仕事と同様、並行に同レベルでやる大切な仕事であったと語る。どちらが抜けてもいい仕事はできなかったのではないかと。

「女の場合は、並行志向というものでしょうか。おかずを作りながら、子供を育てながらいくつかのことが考えられるんですね。自然を見ながらいろんなことを発想したりして。」「超人間じゃないから、すべてのことはできない。でも女の勘ってするどいから、この年はこれという感じで、やることを選んでこれたし。あまり、よそがどうとは考えないです、完全ではないから。結局、自分との闘いで、きのうよりも自分がちょっとでも前進すればそれでいいことだと思うんです。」

また、若い人に時には、「やりたいことが見つからなかったり、どうしようかと迷ったりした時、とりあえず建築の道を選んでみるのもいいですよ。」というそうだが、やわらかい言葉の中に、融通のきく分野ともとれるが、一筋縄ではいかない知識、よりよい人間関係をつくりだしていく人間性、生活に根ざした経験の蓄積、才能とも考えられるデザイン力など欠くことのできないものがなんと多くあることか。それをさらりとやってのけている淡々とした語り口に、小さい頃からの、さまざまな土地で培ってきた実体験が、大きな自身となってきていることを感じさせる。

今でも昔の友達とのつきあいはあるという。一つ一つはバラバラに見えても、長い年月がたつと一つの所にそれが集約されてくる、いろいろなつながりを大切にしていきたいと言われるその人柄は、今後も働く婦人の水先人として、新しい人材を育てていくだろうし、地域活性のためにもどんどん新しい試みに、取り組んでいっていただきたい。　（く）

5階建集合住宅にエレベーターは必要か

野口　浩

戦後の中層集合住宅はエレベーターのことなど考える必要がなかった。壁構造が12m4階建を上限に決めていたことも関連していたが……。

昭和33年頃より住宅公団が5階建2戸1階建をつくるようになり（民間では特認で実現するのにやや時期がずれる）5階建エレベーターなしが普及した。多少の不自由より戸数確保が優先した。5階に住む人にとっては狭い急な階段、途中で一息入れないと昇れないし、モルタル塗の床、鉄のノンスリップと貧素な仕上等、卑屈な思いすらしたと思う。しかし、2戸1階数はもちろんのこと戸数が少なければ、廊下式のデメを考えれば一層エレベーターの設置を考える余地はなく世間に認知されていった。

世の中がすすみ、エレベーターの小型化や普及型で出たことにより、環境条件は変わってきた。

この時点で改めて、この問題を見直してみたい。もちろん5階建といっても規模により考え方が変わるが通常2000㎡20戸以下を対象にしたい。

私の事務所で担当した5階建の事例は過去10年間で20例あるが、エレベーターの設置の要、不要の意志決定には話題が多く興味深い。

①中級1100㎡3戸1階数14戸の分譲、事業主が絶対必要と主張。

②92室の高級ワンルームマンション（中廊下式賃貸）で施主担当者が不要と主張。

③延1700㎡19戸設置条件で設計コンペ

①②は設置、③は入選後検討して設置せず。

事業主サイドでも担当者と上司の意見が分かれたり個人の場合は極めて独断的に決まることがある。反面、理詰めや経済的原則だけで判断されぬことが多いのも事実であり、迷って設計者に意見を求められることもしばしばある。戸数が少ない場合、コストUP、メンテ費用へのはね返りに耐えれるか、エレベーターなしの場合、5階部分が売れぬのではないか etc.

施主の考え方やポリシーが確立されている場合は良いのだが、設計者自身適格に判断できる能力があるのか、分譲か賃貸か、立地、建物のグレード、規模、事例など決める要素はいくつかある。

設置の有無2通りのプランを作成して検討すると意外に、理詰めでは設置しない方が良いという結論になることが多い。経済的な理由はもちろんだが、設置しない方がよいプラン（主として2戸1プラン）になることも大きな要素である。分譲の場合、エレベーターシャフトが面積算入されるように改正されたことにより、一層その感が深い。

1000㎡弱程度の敷地の場合、日影規制や道路斜線で5階部分が欠けることが多い。それを逆手にとって4階とメゾネットにしたり、高い天井や屋根裏の物入、屋根を細工して奥の部分にも光を入れること等により下階にない魅力をつけ加えることができる。

分譲の場合でも4階より若干安くすることにより、下階により早く売れたケースが多い。

ただし階段幅をやや広く、蹴上もややゆるく、16段／階タイルを貼ったやや高級な仕上等……配慮するのはもちろんである。理詰めで設置しない方に歩があるとわかっても、もし5階部分が売れぬ場合（賃貸の場合、入店者がない場合）の不安を示される場合には、「4階より○○円安くして置いて下さい。」「売れなければ私が責任をとります。」ということにしている。もちろんそんなことになったことは一度もない。5階に歩くのがいやな人は買わないし。30%の人に価値を認めてもらえば良いというのが持論である。70%は設置してない。

エレベーター屋さんには悪いが、どうもそう思えてならない。

2年ほど前、日本を代表するデベロッパーが市場調査した事例があるので紹介しておく。

5階建マンションの5階に住む場合、エレベーターの必要についてお尋ねします。

エレベーターを設置した場合は、

30戸程度のマンションで販売価が50万円高くなり管理費が2500円高くなります……。

以上の設問に対して価格や管理費が高くても必要とした人は平均2/3、物件によっては半数という結果がでている。

しかし、現実には20戸程度では、もっと差が出るし、5階に前記のような付加価値をつけることによりエレベーターなしで充分というのが私の現時点での結論である。もちろんこれは一般論であり、高級で要望のある場合、19戸で2基つけた事例もある。

3000㎡級以上の場合は別だが、通常この規模だと敷地もそれなりにあり、良いプランで7～11階になるケースが多くて（空地を多くとり駐車場や緑地を取る関係で）意外と事例が少ないのが経験的にも言える。

（㈱野口建築事務所所長）

関西国際空港設計競技について

8月30日東京（建築家会館）と大阪（大阪商工会議所）の2ヵ所で再度公開質問状を公表した。

この公開質問状に対し、9月10日付けで関西国際空港株式会社から「新日本建築家協会の再質問に対する回答」が寄せられた。ＪＩＡとしては設計競技の結果が出た段階で、次の対応を考えることとし当面事態の推移を静視することとなり、ＮＥＷＳを通じて当面静観する理由、次の時点での対応策等について周知を図ることとなった。以下にその再質問状と再質問に対する回答を記載する。

再び「関西空港旅客ターミナルビル」設計競技について（質問）

昭和63年8月30日

（社）新日本建築家協会

関西国際空港株式会社は、昭和63年7月15日、新日本建築家協会（ＪＩＡ）の声明に対する見解を発表された。その迅速な対応は評価したいが、我々が指摘した問題点や疑問に対して、納得できる説明等が殆ど得られなかったことは残念である。そこでこの際、さらに具体的に疑問点を指摘することとしたい。

これまで報じられたところによると、関西国際空港株式会社は、国内の設計事務所6者に委託し、61年1月以来約2年をかけて基本構想案の作成作業を進め、その成果を外国の6つの空港当局に示して意見を求めた結果、パリ空港公団の提案を受け入れて、基本構想を作成したとされている。

そして、今回の設計競技参加15者の選定指名とほぼ同時に、パリ空港公団を含む3者の共同企業体と基本計画の策定について委託契約を結び、現在その業務が進行中とのことである。

このような状況に対して、我々は前回の声明で「各段階の著作行為の権限と責任がまことにあいまい」であり、「設計行為の権限と責任は誰にあるのか疑問視される」と指摘している。

第一の疑問は、この基本計画作成とその後の設計業務における、パリ空港公団（ポール・アンドリュー氏）の役割についてである。パリ空港公団が共同企業体に加わることとなった経緯そのものにも理解しにくい面があるが、仮に基本的なコンセプトの提案者として主務者もしくはそれに準ずる権限と責任をもって参加しているとすると、今回の設計競技により新たに「デザインアーキテクト」が選任されることをどう受け止め、そのデザインアーキテクトとの役割分担がどのようになると考えたらよいのか我々には理解し難いところである。

第二の疑問は、日本の設計事務所及びコンサルタントとパリ空港公団の手によって基本構想が作成され、引き続いて現在基本計画が進行中であるのに、別途それと併行して国際空港設計競技が行われているのが何故かということである。

基本計画は、基本構想により設定された設計条件をさらに詳細に検討するものと説明されている。そうだとすると、設計競技参加者は、基本構想に基づき提示された設計条件に従って案を作成し、まだ提示されていない基本計画に基づく設計条件によって審査されることになるのであろうか。それとも基本計画の成果とは関係なく審査が行われ、当選案は基本計画に基づく変更の要請に応ずるのは当然であるとなるのであろうか。

そして、さらに重大な疑問は、設計競技当選者の権限と責任についてである。当選者は、現在基本計画作成の作業を進めている3者とともに、共同企業体を組織して基本設計を行うが、その具体的な役割分担についてはデザインアーキテクト（当選者）が決定した後、当選者を含む共同企業体の構成員と協議して、関西国際空港株式会社が決定することとされている。

現在、基本計画策定業務を行っている設計事務所等は、次の基本設計の段階では、原則としてプロダクションアーキテクトの役割を果たすものとし、それとの対応でデザインアーキテクトなるものを考えているようであるが、その具体的役割や他の3者との責任分担関係は明らかにされていない。質疑応答等で承知のうえとはいえ、設計競技の参加者はこのような状況を納得しているのか、さらに、当選後の処遇に果たして満足するものか、疑問とされるところである。この事例は、今後我が国で行われる一切の創作活動を対象とする提案行為の招請（国際コンペを含む）のあり方に、極めて好ましくない影響を及ぼすものとして深く危惧するものである。

第三の疑問は、48といわれる応募者から、どのような審査方法により15者が選定されたのかということである。伝えられるところによれば、審査員の多くはこの選定作業には全く関与しなかったとのことであるが、一方では自らの予測に反して指名されたという者がいるかと思えば、他方では客観的に見て、指名された15者のいずれにも劣らないと思われる者が選に漏れている。関西国際空港株式会社は指名発表時に5項目の選定基準を示しているが、それらに照らしてみても選定結果は納得し難いものがある。内外に選定手続きの公正さを示すためにも、関西国際空港株式会社は15者の指名に到る選定作業の内容とその理由を公開すべきであると考える。

第四の疑問は、前回の声明で「設計監理者の施工業者からの分離独立のルールが事実上無視」されていると指摘したように、設計競技に建設業（企業）の参加を認めていることである。

従来、建設業のスタッフが個人として設計競技に参加を認められた例はあるが、それと、今回のように建設業そのものを指名し参加させることを同列とみなすことはできない。

また、関西国際空港株式会社の「見解」では、建設業に従事する者が当選した場合、その組織から身分を分離しなければ、当該企業は建築工事の入札に参加できないから公平だとし、前例として、国立劇場や最高裁をあげている。

しかし、これら過去の例を見ると、いずれも当選者を出した企業がその建築の工事を受注しているという事実がある。このように形式さえ整えれば「公平」であるとして通る日本的慣習が、今後とも国際社会で通用するとは、到底考えられないところである。

さらに不可解なのは、我が国を代表する大手の建設業5社が、いずれも揃って外国の有力な設計事務所と共同で応募し、参加を認められていることである。

これは基本設計、実施設計段階での共同企業体におけるデザインアーキテクトとプロダクションアーキテクトの役割分担するのに、都合の良い組み合わせを考えてのことであろうとする見解もある。

しかし、そうだとするとプロダクションアーキテクトの役割を果たすと思われる建設業の設計陣は、当選した場合、共同企業体に参加して一体どのような役割を果たすのか理解しかねることとなる。何故ならば、共同企業体に含まれる他の3者は、それ自体が「原則としてプロダクションアーキテクトの役割を果たす」ものと考えられており、そこには我が国最大の建築設計事務所が含まれているのである。しかも、当選した建設業が肝心な建設工事の入札に参加するには、自社の有能な設計陣を社外に手放さなければならない。

これらのことを考えあわせると、当選した場合は主務者である外国の建築家だけが以後の設計業務に参加し、建設業は参加しないという形をとることも考えられる。

しかし、それでは一体何を目的にその企業は多額の費用とスタッフを動員して設計競技に参加するのかということになろう。それは国際的には全く理解し難い行為と映るのではないか、そして、その裏に外国人には理解しえない不公平なからくりがあるとの疑惑を招くようなことにならないだろうか。

そればかりではない。もし外国の建築家と組んだ建設業が当選しながら、自らはその後の設計業務に参加しないとすれば、その建築家は建設業の無償の援助により当選したと見られることとなろう。海外からの参加者は、その実態を知れば強い不満と不信の念を抱くに違いない。我々が「国際社会にあって不公平のそしりを招き、国際世論の指弾を受けることのないよう」指摘したのはこのことにも当てはまる。

さらに、今後構成される共同企業体のあり方によっては、設計と施工との間の公正性の確保が危ういものとなるおそれがある。

欧米においては、公共的な事業の実施については、設計者及び施工者の選定に関する厳格な法規制が存在する。また、我が国の行政運営においても、慣習として公共事業における設計施工の分離、設計監理を行なう者の第三者性の確保は守られている。市場開放の第1号として、そのプロトタイプとなるとみられる本件の業務運営が、著しく国際慣行に馴染まないのみならず、先方の法制では規制されており、我が国においても行政の慣行として守られてきたルールを、仮に逸脱することがあるとすれば重大である。

今回の事例はこのような問題点を抱えており、これが今後の前例となるとすれば極めて憂慮すべきことといわねばならない。ＪＩＡとしては、これらの問題点を指摘することにより、関係者の間に理解が深まり、今後、我が国で行われる設計競技が国際的に見ても問題のない、公正なものとなることを期待するものである。

昭和63年9月10日

新日本建築家協会の再質問に対する回答

当社が実施中の関西国際空港ターミナルビル設計競技については、本年7月11日付の貴協会の声明に対し、同7月15日付で当社の見解を明らかにしたところであり、今般の再度の御質問についても、基本的には前回の当社の見解に尽くされていると考えているが、御質問の事項に関し改めて下記のとおり回答する。

1．設計作業における具体的役割分担については、デザインアーキテクトが決定した後、協議して当社が決定する方針であり、このことについては既に募集要項に関する質疑応答書で周知し、指名１５者とは契約書で確認しているところである。

2．指名者は、当社の契約審議委員会で慎重な審議を行い決定したもので、当設計競技にふさわしい優秀な建築家を選定することができたと考えている。

また、選定基準については本年6月6日、１５者の指名者発表に際して応募者の代表作品、業務実績、実施体制、国内的，国際的な著名度等を比較するとともに、優れた作品や新しい発想による作品を期待できるか、さらに基本設計業務を円滑に遂行できるかなどという観点に立って総合的に評価した旨を公表したところである。

なお、当社は応募者から選定もれの理由について照会があった場合には、理由を説明しているが、非選定者への不利益も懸念されることから、個々の選定理由を一般に公表することは行わない方針である。

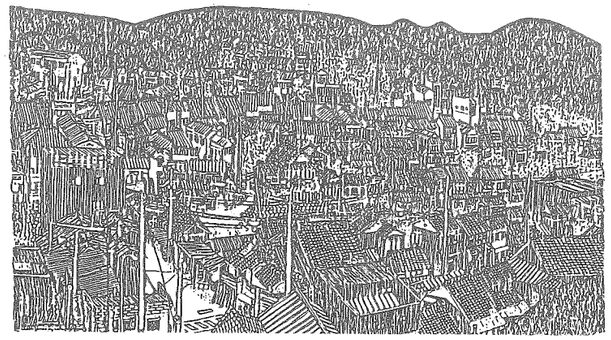
3．外国の建築家と組んで応募した建設会社が設計競技に参加することにより、工事の発注が不公平になるとの指摘については、前回の回答とおり当社工事の入社参加資格の条件や、開放的で透明性のある発注制度に十分注意を払ってきたところであり、何ら問題はないと考えている。

お知らせとお詫び

新住所のお知らせ
東洋シャッター㈱
〒454 名古屋市中川区北江町2-12
TEL (052)352-8061 ㈹
FAX (052)352-8060

賛助会員の名簿で記載もれがありました。
菱電サービス㈱中部支社
名古屋市中区栄4-1-1 中日ビル
TEL (052)263-7631 ㈹
FAX (052)264-0194

ふれよう！　いきずく足助ウオッチング



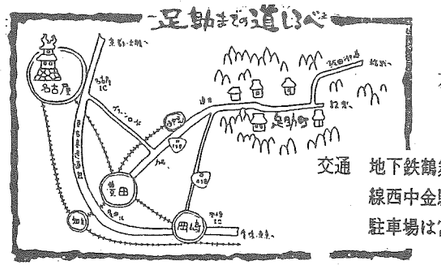
１１月６日（日）10時現地集合

（雨天決行）

さわやかな風が頬をなでる
そんな秋の一日を、
建築ウオッチングで過ごしませんか。
ぜひご参加ください。

足助ウオッチング研修委員会

集合場所　足助八幡宮（ＪＩＡの旗が目印）
申し込み方法　電話で22日（土）までにＪＩＡへ　052(263)4636
当日参加でも結構ですが、申込み頂いた方にはステキな資料とスケジュールを贈呈
案内の先生　足助のことならなんでも博士
資料館の鈴木館長



ＪＩＡは一般の方々と交流を深めるための努力を重ねていく所存です。
友人、知人、隣人、家族ぜひ皆様お誘い合わせてご参加下さい。

交通　地下鉄鶴舞線・名鉄豊田線経由で三河線西中金駅からバスで15分
駐車場は宮町駐車場が便利

製品紹介

塗る時代から貼る時代へ！

高級粘着フィルム　ファンタック

関西ペイント株式会社

近年のＣＩブームと共にマーキングフィルムの需要が急増している。また最近ではマーキングフィルムは“貼る塗料”とも呼ばれ市場で脚光を浴びている。

理由は時代に適応してカラフルでビジュアル、ハイクオリティでしかもコンビニエンスが“貼る塗料”だからである。

当社では永年にわたって培ってきた塗料、塗装及び色彩設計のノウハウを生かし、貼る塗料「ファンタック」を開発し、上市した。

「ファンタック」は厳選されたベースフィルムに耐久性の優れた強力粘着剤を塗付した高耐久性マーキングフィルムである。

現在「ファンタック」は各用途別に次のタイプがある。

・ファンタックデラックスフィルム（標準色49色）
５～７年以上の高耐久性フィルム。また耐久性インキによる印刷加工も可能。
建築外装（平滑面）看板、自動車、車両などの用途。

・ファンタック反射フィルム（標準色６色）
フィルムにうめこんだ極微小なガラスビーズの１つ１つがすぐれた反射性を有し、７年以上の耐久性を保つ。
道路標識、屋外看板、車両などの用途。

・ファンタック蛍光フィルム（標準色４色）
日光や照明のもとで蛍光を発し、鮮明に輝く。２年以上の屋外耐久力を有す。
広告宣伝用（ウィンドーステッカー、看板）安全防災用（消火器、火災報知器、非常ドアー）工事現場や道路障害物の表示などの用途。

・ファンタック透明カラーフィルム（標準色12色）
色透明タイプで高耐久性に優れており、透過色が鮮やかな塩ビフィルムを使用。
内照式看板サイン、広告塔、ウィンドーディスプレイなどの用途。

・ファンタック再はく離フィルム（標準色３色）
短期間（１年以内）使用に適する耐久性とはく離性の両方をかねそなえているフィルム。
ウィンドサイン、シーズンデコレーションなどに最適。
その他、貼紙防止用ファンタックザクロン、着水防止用ファンタックデフロなどの各種機能性フィルムも取り揃えている。

当社では東西にファンタック総合センターを有し、優れたデザイナーやインストラクターなどのスタッフをもち、ロゴ・マークのデザイン制作、ハンドカッティングやマシンカッティング、印刷加工などを行っている。

また全国各地に設けたカンペファンタックセンターを通じ、ファンタックに関する一貫した業務サービスを行っている。

照会先：関西ペイント㈱名古屋販売部
℡　052-931-6311　北岡國次

祝 ARCHITECT 創刊

アイカドアー・アイカポストフォーム
アイカシステムキッチン
アイカ工業株式会社
名古屋支店
支店長　酒井眞孝
名古屋市中区千代田３－２２－２２
☎ (052)３３１－４３５３㈹

耐酸被覆鋼板（オリエンタルメタル）の製造
屋根・壁・樋の設計施工
オリエンタルメタル製造株式会社
名古屋支店
支店長　田中　博
西春日井郡西枇杷島町小田井２－１８
☎ (052)５０３－９６６１㈹

硝子化学品、セラミック等の製造販売
旭硝子株式会社
名古屋支店
取締役支店長　神村正弥
名古屋市中村区名駅４－１１－２７　第２豊田ビル東館
☎ (052)５８３－２８１１

総合建設業
小原建設株式会社
代表取締役社長　小原　睦
岡崎市明大寺町字西郷中３７
☎ (0564)５１－２６２１㈹
名古屋支店　名古屋市中区栄５－２－３８
☎ (052)２４１－９３３１㈹

総合建設業
安藤建設株式会社
名古屋支店
取締役支店長　竹野忠夫
名古屋市中区丸の内１－８－２５　安藤ビル
☎ (052)２１１－４１５１㈹

総合建設業
株式会社　熊谷組
名古屋支店
取締役支店長　窪田時夫
名古屋市中川区西日置１－１－５
☎ (052)３３１－３３６１㈹

建築写真・ＶＴＲ・16㎜映画撮影
株式会社　ＳＳ名古屋
代表取締役　中平等真知子
名古屋市北区浪打町１－１５－１
☎ (052)９９１－１１６１㈹

タイル製造・販売
上山製陶株式会社
名古屋営業所
所長　水野貫一
名古屋市千種区今池２－１－３３
☎ (052)７３１－００２３㈹

総合建設業
株式会社　永楽開発
取締役社長　牛田米一
名古屋市東区芳野１－１３
☎ (052)９３１－６７６１㈹

電気設備工事
株式会社　弘光舎
名古屋支店
支店長　小野義明
名古屋市西区浅間２－５－１１
☎ (052)５２２－４４１１㈹

祝 *ARCHITECT* 創刊

21世紀を見つめ、明日を築く

株式会社 鴻池組
名古屋支店
常務取締役支店長 小出 勲
名古屋市中区錦2-19-1
☎ (052) 202－4500㈹

オートマティックパーキングシステム

新明和工業株式会社
名古屋営業所
所長 手塚信夫
名古屋市中村区名駅4－4 クリヤマビル
☎ (052) 563－7231㈹

防水工事・外壁化粧防水・断熱工事

国際建資株式会社
名古屋営業所
所長 横井 剛
名古屋市千種区春岡1－2－3
☎ (052) 762－6322

ポンプ・送風機・冷凍

株式会社荏原製作所
中部支店
取締役支店長 大野範正
名古屋市中区栄3－7－20 日土地栄町ビル
☎ (052) 264－4111㈹

舞台機構・エレベーター・遊戯機械

三精輸送機株式会社
名古屋出張所
所長 若狭忠治
名古屋市中区栄4－1－1 中日ビル
☎ (052) 262－2871㈹

熱と空気のエンジニア

株式会社 大気社
名古屋支店
常務取締役 羽場健一
名古屋市中区錦2－2－13 センタービル
☎ (052) 211－1535㈹

軽量物搬送設備設計・施工・販売

シーメンス株式会社
中部営業所
所長 佐合三代司
名古屋市中村区名駅4－8－12
☎ (052) 541－3201

総合建設業

大日本土木株式会社
名古屋支店
代表取締役社長 田口 栄
名古屋市中区栄1－7－33
☎ (052) 231－6861㈹

吹付塗料

四国化研工業株式会社
名古屋営業所
所長 斉藤 薫
名古屋市北区金城4－3－13
☎ (052) 916－1851㈹

一般住宅瓦、社寺仏閣瓦、店舗装飾瓦

合資会社 坪井利三郎商店
代表取締役社長 坪井光男
名古屋市中区栄5－22－7
☎ (052) 241－0926㈹

祝 *ARCHITECT* 創刊

日立製作所総合特約店

東亜工業株式会社
取締役社長 富田和夫
名古屋市中区栄3－10－22
☎ (052) 251－7211

冷熱機器総合メーカー

三菱重工業株式会社
名古屋営業所
所長 岡野忠夫
名古屋市中村区名駅3－15－1 名古屋ダイヤビル2号館
☎ (052) 565－5500㈹

あすの空気調和をになう

東洋熱工業株式会社
名古屋支店
常務取締役支店長 徳田蔵三郎
名古屋市中村区太閤5－5－1
☎ (052) 451－7171㈹

学校及び健康機器設備工事

株式会社 ヤガミ
代表取締役社長 八神順一
名古屋市中区丸ノ内3－2－29
☎ (052) 951－9251㈹

陶磁器・タイル・浴槽・浄化槽

株式会社 ニッコウ
名古屋営業所
代表取締役 中村兼治
名古屋市東区相生78 主税ビル
☎ (052) 931－2691㈹

あらゆる建築に貢献する

株式会社 長瀬組
取締役社長 長瀬美久
名古屋市西区城西4－25－20
☎ (052) 531－1536㈹

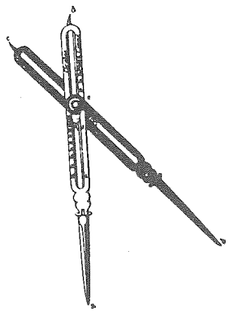
家具設計・生産・販売、インテリア設計・施工

株式会社 冨士道木工
代表取締役 冨士道周明
名古屋市中区栄3－34－40
☎ (052) 262－5547㈹

Japan Institute of Architects

社団法人
新日本建築家協会

新日本建築家協会(JIA)は、建築家の職能確立と、来たるべき時代の建築家像を求めて
昭和62年5月に発足したわが国唯一の建築家の団体です。
ここで、職能確立と申しました意味は、医師が人間の生命に、弁護士が人間の人権に
関わるように、建築家は人間生存の基盤に関わるものということで、
欧米では19世紀初頭以来3つの基本的な職能(プロフェッション)と言われてまいりました。
建築家は、都市計画から建築の設計監理を通じて、人間の健康と安全に深く関わっており、
大きな社会的職責を担うものであります。
またさらには都市と建築をそれぞれの時代の文化を象徴するものにまで高める役目を
果たしてきたのです。
そのような建築家という職能は、ある一定の技術と技倆をもったものに与えられる称号であり、
あくまで個人に属するものでありますが、大規模な都市計画、さらに建築設計に際しては
個人の力だけではではできないものもあり、いろいろな組織形態をもっております。
つまり数人の協同者・協力者をもって、ほとんど個人的に行っている場合、
あるいは経常的に数十人、あるときは数百人、大きなものになると千人単位の事務所組織をもって、
先に述べたような設計監理を行っているのであります。
そのためには、正当な報酬を受けることなしには優れた設計監理を行いえないことも
当然であって、現在の日本のその水準は世界に比べて非常に低いばかりか、
過当競争のために、低い水準をさらに割ったところにまで妥協をしいられ、
それが設計の質の低下を招く一つの大きな原因になっておることは、残念なことであります。
しかし、正当な報酬を受けるということは、営利行為とは峻別されるものでありまして、
そこに職能人と事業者の違いがあるのですが、この大切な点に関しての一般の理解は
大変に低く、建築家の職能はまだ社会から信頼をもって定着しているとはいえない状況にあります。
日本の都市とそれを構成している無数の建築物の文化的水準は、
現在世界的にみて、いまだに甚だ低い水準にあることの最大の原因は、以上述べてきた
ことにつきると思います。
この状態をこのまま放置しているわけにはいかないのです。
こうした状況を憂え、建築の質の向上と文化的蓄積のために
職能の確立をめざす多くの建築家は、昭和62年5月に新日本建築家協会を設立して
約7,000人の会員をもってスタートいたしました。
私どもの差し当たっての目標は15,000人を考えております。
一方、日本では歴史的に設計施工をともに行っている建設企業が成熟しており、
高い技術水準をもっているのは世界に例をみないことであります。
私たちは、この存在を高く評価しておりますが、
同時に私たちが推進している自由で独立した職能人としての建築家やその集団も
大切であることを、一般社会から一層の理解をえたいと考えております。
今後さらに激動する社会の中で設計にかかわる業態にはさまざまなものが予想されますが、
私たちは、それら異なった立場にある設計者の存在を相互に認め合った上で、
協力していきたいと考えております。
このような立場にたって私たちJIAは、日本の国土と都市と建築という生活基盤をより豊かに、
より美しくしていき、文化国家を建設していくことに貢献したいと考えております。

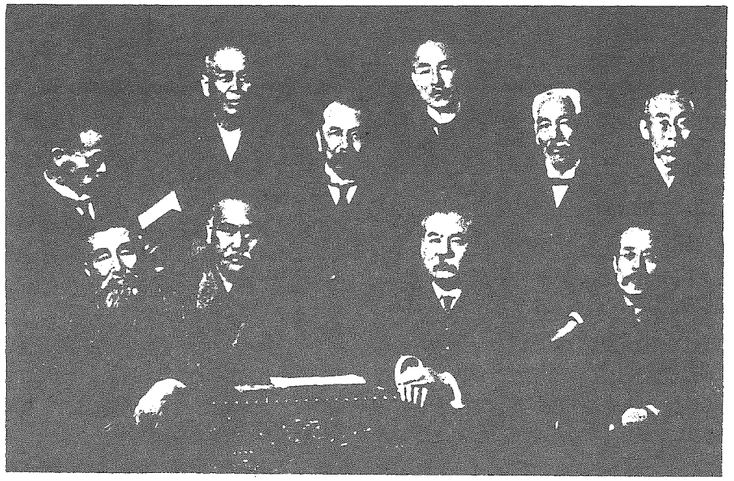


JIAは日本の建築家個人の団体です。

アーキテクト・Architect(建築家)の語源は、ギリシャ語のアルキテクトンで"大技術家"の意味です。アルキテクトンは、建造物のみならず都市計画にいたるまでの生活環境全般を責任をもって創造していく"職能人(プロフェッション)"に与えられた称号で、欧米では、医者、弁護士とならんで建築家が職能人の筆頭にあげられ、社会から信頼されてきました。新日本建築家協会(JIA)は、そうした建築家の職能をわが国に定着させようと、昭和62(1987)年5月に誕生したわが国唯一の専業建築家の団体です。　創立会長は、日本を代表する世界的な建築家、丹下健三氏。会員は、建築設計事務所、官公庁、教育研究機関、民間会社等の組織のなかで責任ある業務を行っている建築家で、わが国の大多数の建築家が参加しています。しかし、建築の施工に使われる労力や資材などから利益をえている者、あるいはそうした企業に雇用されている建築技術者は、特別の場合以外は含まれていません。また、JIAの会員数は設立時、約7,000名でしたが、近い将来には15,000名を目標に考えています。
この団体は、単なる親睦団体ではなく、今日わが国の社会公共が必要とする建築家の、職能を確立するためのあらゆる活動を行う団体です。わが国の建築家団体の歴史は古く、さかのぼって明治19(1886)年に設立された造家学会に端を発しています。

私たちの先輩が
日本の建築文化を担ってきました。

ここにある一枚の写真をご覧ください。この写真は、わが国に西欧的な意味での建築家を誕生させた工部大学校(東京大学工学部の前身)の第1回卒業生たちで、4人の草創期の建築家がいます。中央に立っているのが明治期における建築界の中心的人物といわれた辰野金吾、その右うしろに曾禰達蔵、前列左端に佐立七次郎、その右に片山東熊――。かれらは明治12(1879)年に工部大学校造家学科を卒業して以来、日本銀行本店・東京駅・赤坂迎賓館・日本郵船ビルなどをはじめとする日本の、近代建築の象徴ともいうべき数々の作品を創りつづけ、明治という時代の文明と文化の"牽引車"となった建築家たちでした。また、かれらは西洋の途方もない文明を懸命に吸収し、咀嚼することに一生を賭けた人たちでもありました。その意味で近代黎明期の建築家たちは、建築というものを建築家の魂の流露としてとらえ、自分たちが何をまもらなければならないかを、よく知っていた人たちであったというべきでしょう。明治19(1886)年に設立された造家学会は、そうした建築家の理念と、情熱によってつくられた日本で最初の建築家団体でした。
その後、大正3(1914)年、辰野金吾、長野宇平治、中條精一郎らを中心としてJIAの前身である全国建築士会が創設、翌年、日本建築士会に改称。ここに草創期の職能建築家の母胎ともいうべき団体が発足しました。しかし、第二次世界大戦をはさんで、建築家は苦難の道を歩むことになります。



[大正4(1915)年撮影/旧工部大学校史料]

いま、JIAがしなければならないこと。

戦後の急激な時代の変化は、住宅問題にはじまり生活環境の整備と、幾多の課題を建築家にもたらしました。しかし、経済優先のあまりに都市・建築は画一化し、伝統的に培われた秩序は失われ生活環境(文化)の破壊が進行したといってもよいでしょう。いま、建築と都市は、人間的なうるおいを喪失して混乱への道を歩んでいます。
こうした時代にあって、建築家はもう一度、アーキテクトという言葉を噛み締め、わが国黎明期の建築家たちの理念と情熱に立ち戻る時がきたといえます。建築は所有者が誰であるかにかかわらず、社会公共性の強いものです。したがって、建築家には職能人としての自覚と倫理性が強く求められています。わが国では昭和25(1950)年、建築士法が制定されましたが、これは諸外国の"アーキテクツ・ロウ"とは異なり、何ら建築家の職能的立場を裏付けてはいません。近代の職能は法制の擁護なくしては健全に社会に定着しえないといわれます。
いまや21世紀を目前に控えて、時代は大きく変貌しようとしています。この時こそ、建築家は高度な知識と経験を基礎とした職能理念にもとづいて、これからの生活環境の創造と建築文化の発展に寄与していかなくてはならないと思います。また、来たるべき新しい時代に即応した建築を、社会公共の信頼と法制の擁護のもとに生み出していきたいと願っています。それが、草創期の先人に学び、その志を次代へ伝える者、つまりJIAに属する建築家のもっとも大切にしなければならない歴史的な役割だと考えているからです。

㈳新日本建築家協会東海・北陸支部愛知部会機関誌
*ARCHITECT*を
貴社の情報の場としてご利用下さい。

・貴社のイメージ広告として
・新製品の発表の場として
・営業所の移転、新設のご案内として
・設計営業担当者のあいさつの場として
・建築家とメーカーとの対話の場として

他に月極定期広告、単発ＰＲ広告も募集
しています。ご希望の方はＪＩＡ事務局まで

※広告の詳細についてはお邪魔してご説明します。

*ARCHITECT*編集部

編集後記

●「ARCHITECT」2号をお送りします。「ARCHITECT」へのご意見、ご批判、ご感想などぜひ寄せていただきたいものです。「ARCHITECT」が会員の中心であり、建築家の思想を社会に広め、新しい会員を獲得する有力な雑誌となるよう育てあげていただきたいものです。

●言葉で語るのも表現行為ですし、絵にかくのも表現行為です。建築も表現行為です。会員のみなさんに原稿を依頼すると多くの方が絵を描けと言われればお手伝いするが文章は苦手で……とやんわり断わられます。編集者は苦労します。

建築家は図面で表現するのは当然ながら文章となると尻込みする人が多いようです。表現する人は、文章であれ、絵であれ、表現したいこと、人に語り伝えたいことが、心の内部に満ち溢れていることと思います。まして今日は建築にとって、あるいは建築家にとってハッピーな時代ではありません。建築で語りつくせない部分をぜひ言葉で表現していただきたいと思います。

文章にするということは頭の整理をすることになりますし、何より合理的な思考が訓練されます。ぜひARCHITECTへ参加して下さるようお願いします。

●今月は野口浩さんに建築の実際的な経験での原稿をいただきました。同じく今号でご登場願ったＪＲ東海の社長須田寛さんは、建築家には幅広い評論家的資質、才能を期待すると語っています。野口さんの原稿を機に建築の実際的な問題の討論の場として展開されることを願いたいと思います。

●今号から「ARCHITECT」は、新日本建築家協会東海北陸支部愛知部会の機関誌として発行することとなりました。

愛知を拠点として取材をしますが、岐阜、三重などの話題もとりあげていきたいと存じます。

大量生産で、どの土地へもどんどん進出していく商品と違って建築設計はあくまで一品生産であり、クライアントの心と心の結びつきのなかでつくられます。私どもは心は世界に向かって開放すると同時に地域にこだわって地域の信頼を高めて仕事をしなければなりません。編集もそうした建築家の仕事を反映させていきたいと存じます。

●三和総合研究所の予測では、今年度後半には景気拡大は最終局面を迎え、来年夏には下降線をたどることになるそうです。設備投資の増加とＮＩＥＳからの製品輸入増が来年草々にも景気の頭打ちをもたらすと分析しています。日銀は「景気の拡大で需要のパイも拡大する」と楽観的な見方をしていますが、建設業界の予測はいかがでしょうか。

ARCHITECT
第２号
発行日　1988・11・1（毎月１回発行）
定価　３８０円
発行所　社団法人 新日本建築家協会
東海・北陸支部愛知部会
発行責任者　栢本良三
編集責任者　森　鉦一
編集　愛知部会ブリテン委員会
建築ジャーナル
名古屋市中区栄四丁目３番26号
昭和ビル５階
TEL (052)263-4636 FAX 251-8495